

令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 京都府 】

学校名【 南丹市立園部中学校 】

1 実践テーマ	【 Ⅲ・Ⅴ 】
2 実施対象者	<p>(1) 下稲葉氏講演会 南丹市立園部中学校1年生 (111名) 教職員 (10名)</p> <p>(2) 富田氏講演会 南丹市立園部中学校全校生徒 (369名) 教職員 (40名)</p>
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <p>① 教科名 (保健体育・総合的な学習の時間)</p>
4 目標 (ねらい)	<p>(1) パラリンピックに目を向け、共生社会に向けての気づきと認識、行動の変容を促す。</p> <p>(2) オリンピック・パラリンピックの精神の理解とオリンピックの生き方に触れることで希望を持ってやり抜く強い意志を育てる。</p>
5 取組内容	<p>(1) 生徒会の取組 世界とつながろうキャンペーン アルミ缶を回収し、換金した金額をユニセフを通じて募金することにより国際貢献につながる活動に取り組んだ。東京オリンピック・パラリンピックを前に、生徒たちの目を世界に向ける機会となった。</p> <p>(2) 事前学習の実施</p> <p>① オリンピック・パラリンピックの歴史についてのDVD視聴 スポーツ庁作成の「オリンピック・パラリンピックに関する指導参考映像資料」を用い、オリンピック・パラリンピックの歴史についての理解を図った。</p> <p>② 東京オリンピック・パラリンピックを観戦して 夏休み期間中に開催されていた、東京オリンピック・パラリンピック2020を観戦し、その感想を夏休みの宿題とした。日本選手の活躍だけではなく、スポーツの素晴らしさやアスリートのそれまでの活動状況を調べながら感想を書いている生徒もいた。</p>

③ 壁新聞の作成

科学部の生徒がオリンピック・パラリンピックに関してまとめた新聞を作成・掲示した。また、講師の富田洋之氏の略歴を掲示した。



④ 講演会に向けての事前指導

下稲葉氏講演会の前に、公認教材「I'm possible」を活用し、障害に応じた専任ガイドがいることや実際のパラリンピックの様子の映像を見せること等を通じて、パラリンピックがどのように行われているのか、また「支える」立場でもある「ガイドランナー」や「コーラー」等の存在について理解を深めた。



(3) 講演会の実施

①日時 令和3年10月27日(水)

対象 1年生111名 教職員10名

講師 日本知的障がい者陸上競技連盟強化ディレクター
(日本パラリンピック委員会専任コーチングディレクター) 下稲葉 耕己氏

講演内容

テレビ会議システムを用いてオンラインでお話を聞いた。パラリンピックの歴史とともに今回の東京大会の選手村の様子や「ガイド」としてオリンピックにも帯同された経験について話があった。また、それらの経験から「健常者」や「障がい者」といった枠組みを取り外し、誰もが安心して暮らせる社会について講演をしていただいた。また、代表生徒4名が前に出て、ブラインド体験を行った。ペアを作り、一人は目隠しをし、もう一人はガイド役を行った。体験を通して段差や狭いところを通る難しさがあることや、ガイドの重要性等を確認した。「見えない」という状態がとても怖いことだと感じたようであった。



(生徒の感想から)

○ブラインド体験をして、目の見えない人に対する指示は大変難しいと感じた。「前行って」「階段あるから登って」

と自分も伝えていたが、いざ自分がアイマスクをして体験してみると、「右なのか左なのか」もわからなかったためとても不安になった。今まで全く気付かなかったことで新しい発見があった。

○今日の講演で障害があってもなくても困っている人の手助けをしたいと感じた。障害があるから特別なのではなく、思いやりやその人の立場に立って物事を考えることができるようになればより良い「共生社会」になっていくのではないかと思います。

②日時 令和4年1月27日(木)

対象 全校生徒369名 教職員40名

講師 アテネ五輪体操団体金メダリスト(順天堂大学スポーツ健康科学部スポーツ科学科准教授)

富田 洋之 氏

講演内容

本来は1月17日(月)に来校いただき、代表生徒2名が登壇し、事前に全校生徒から収集した質問を中心にインタビュー形式で行う予定をしていた。しかし、講演会当日、本校が新型コロナウイルス感染症により臨時休校となったことから直前で中止した。富田氏と日程を再調整し、1月27日(木)にテレビ会議システムを用いて講演会を行う様、計画したが再び本校が、臨時休校となったため、最終的に27日(木)に担当教員と富田氏で対談を行い、その様子を録画して、後日、全校生徒に視聴させることにした。

富田氏からは自身の中学生時代のことやオリンピックでメダルを獲得するまでの心境、メンタル面の保ち方、中学時代に大切にしたい点など幅広く話をしていた。後日、生徒には感想を記入させた。



(生徒の感想から)

○テレビで金メダルをとっている姿を見ると「いいなあ」とか「楽しそう」と思っていたが、実際は楽しいだけではなく日の丸を背負う覚悟やプレッシャー、大会までの自分への焦りなど、様々な苦勞をされて、オリンピックの舞台上で活躍されていることがわかりました。富田さんのおっしゃった「こつこつと続ける」ということは、スポーツだけでなく何事にも関わることなので、私もすぐに諦めず続けていきたい。

○今回の講演会で印象に残ったことは、緊張したときにその緊張を「ネガティブ」に考えないことや「結果を残したい」ということよりも自分の全力を尽くすことが大切だとお

	<p>っしゃっていた点です。今後、受験もあり、不安もありますが、周りばかりにとらわれず、自分のすべきことに集中したいと思います。</p> <p>(4) 事後学習の実施 下稲葉氏へは感想文を送付し、その感想文に書かれていた質問に答えてもらったものを返信いただいた。後日、生徒へは返答をした。 富田氏にも同様に感想文を送付する予定にしている。</p>
6 主な成果	<p>○富田氏の講演会は、「本番で力を発揮するためにはどうしたら良いのか」等スポーツだけではなく、日常生活にも通じる講演であったため、多くの感想から前向きな学校生活を送ろうとする生徒の様子が見られた。</p> <p>○本校はこの事業に取り組んで4年になるが、本年度は、オリンピック・パラリンピック開催年度ということもあり、教員のオリンピック・パラリンピックに関わる意識も向上している。その意識は全教職員が、道徳や国際理解教育など様々な学習において継続的に世界に視点を向けた授業展開を行っていることは大きな成果である。</p>
7 実践において工夫した点 (事業の特色)	<p>○講演会だけの単発的な事業ではなく、各学年で国際理解に関わる内容やオリンピック・パラリンピックに関する内容を教科や領域で意図的に入れることで、年間を通じた活動とすることができた。</p> <p>○下稲葉氏の講演会ではオンラインでの開催であったが、ただ聞くだけに終わるのではなく、体験をすることによって身近なこととして感じる事ができた。</p>
8 主な課題等	<p>○実施にあたり、校内での指導体制の確立をどうしていくのか。</p>
9 来年度以降の実施予定	<p>○教育課程のバランスを考え、年間を通して教科横断的な活動として本校のオリパラ教育を確立させていきたい。また、パラリンピックからは生涯スポーツの観点だけでなく人権に関わる内容にも目を向けさせる機会となるため人権教育部等とも連携をしていきたい。</p>